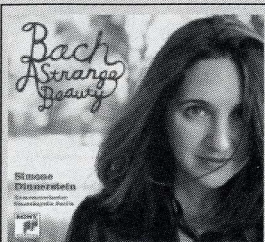


# 新たな可能性秘める 知的で伸びやかなア・プローチ

ディナーズ・スタイン（D）のソニー移籍第1弾  
『ディナーズ・スタイン／プレイズ・バッハ』を聴く



ディナーズ・スタイン／プレイズ・バッハ  
〔コラール〈主イエス・キリストよ、われ汝に呼ばわる〉（ブゾニ編）、ピアノ協奏曲第5番、コラール〈たしかにその時は来れり〉（ケンプ編）、イギリス組曲第3番、ピアノ協奏曲第1番、コラール〈主よ、人の望みの喜びよ〉（ヘス編）、平均律クラヴィーア曲集第2巻～前奏曲とフーガ第2番〕  
シモーヌ・ディナーズ・スタイン（p）  
ベルリン国立歌劇場室内o  
〈録音：2010年6、9月〉  
〔ソニークラシカル©SICC1443〕

Kazunobu Yasuda 安田和信

## ドミナント進行系で 緊密な構成による選曲

2005年録音の《ゴルトベルク変奏曲》「テラーク」で鮮烈なデビューを飾ったディナーズ・スタインがソニー移籍後、初めての音盤を出した。大曲に挑んだデビュー盤とは異なり、あるいは同一曲集や同一ジャンルを並べるといふのも異なり、今度のバッハ・アルバムは別掲の曲目一覧が示すような、非常に面白い作りになっている。協奏曲2曲に加えて、組曲、前奏曲とフーガ、コラール編曲のピアノ

ノ編曲版が並んでいて、一見したところ、多彩ではあるが無造作なごった煮と映るかもしれない。だが、そうでない。ヘ短調協奏曲の前に同一調のコラール編曲（ブゾニ編）、ト短調組曲の前に同主調のコラール編曲（ケンプ編）を置いて調的なまとまりを作り出し、さらに二短調協奏曲とハ短調の幻想曲とフーガの間にト長調のコラール編曲（ヘス編）を挿入することでドミナント進行的な調連関をもたらしように配慮されている点で、緊密な構成となっていると見ることができるのである。多彩さと緊

密さがうまく融合した選曲である。

## 微細な部分まで明晰 俊敏さ失わず多量な情報

本盤でのディナーズ・スタインは、必要以上にウエットにならない渴いた響きを基礎にして、強弱の微妙なニュアンスで変化に富むアーティキュレーションを実現しようという配慮をしているようである。また、リズム造形のフレキシビリティも相変わらずだが、今回は時に非常に大胆なデフォルメを見せることもあつて驚く。とくに協奏曲ではオケにイン・テンポ的な歩みをさせておきながら、自らの語りはその限りではないという部分が少なからずあつて、たいへん刺激的である。もともと本盤収録の2作は、両端楽章がいずれもある程度の速度で演奏されると、やたらに細かい音符が突然現れて、そこでいきなりテンポ・ダウンみたいなことが起きがち。ディナーズ・スタインは決して遅めでないテンポを取るのだが、上記のような個所できわめて俊敏な動きをみせ、情報量の多さを強調するのだ。

ちなみに、管弦楽はピアノの発話に対して挑戦的な振る舞いをする録音になっていないが、ベルリ

ン古楽アカデミーを創設期から支えたシユテファン・マイがリーダーを務めることから想像されるように、鋭角的な表現を志向する。ディナーズ・スタインは高度な対位法書法を巧みに聴き手の耳へと届ける手際の良さを持つているが、本盤でもそれは大いに発揮されている。それは組曲の最終楽章、ジークにおいて、左右の手で一つの声部を紡ぎ出す連繫ブレイの手際の良さにももちろん反映されている。あるいは、ケンプ編のコラール編曲は後半で内声部に主旋律が置かれるが、細かく動く外声に挟まれてこれをうまく引き立てるところはけっこう難しい。しかし、彼女はこれみよがしにではなく、だが朗々と「今ぞ喜べ」の旋律を歌わせるのである。

最後にまとめ風に書かせてもらうならば、ディナーズ・スタインは、モダン・ピアノによるバッハ演奏の盛り返しに顕著な現在、新たな展開を示す可能性がある。歴史的な演奏実践という枠組みの中で小さく纏まるわけでなく、かといつてかつての伝統的な様式にあるわけでもない。第三の道と言うべきかどうかは別として、可能性を感じさせるピアノリストの一人である。